

42

日本の環境

特242
299

元會資料第六拾貳號

昭和十一年八月二十八日代印

兵庫縣國防協會

播州國防研究會本部

(姫路縣隊區司令部内)
電話 大坂二八八〇五



0010551-000

特242-299

日本の環境

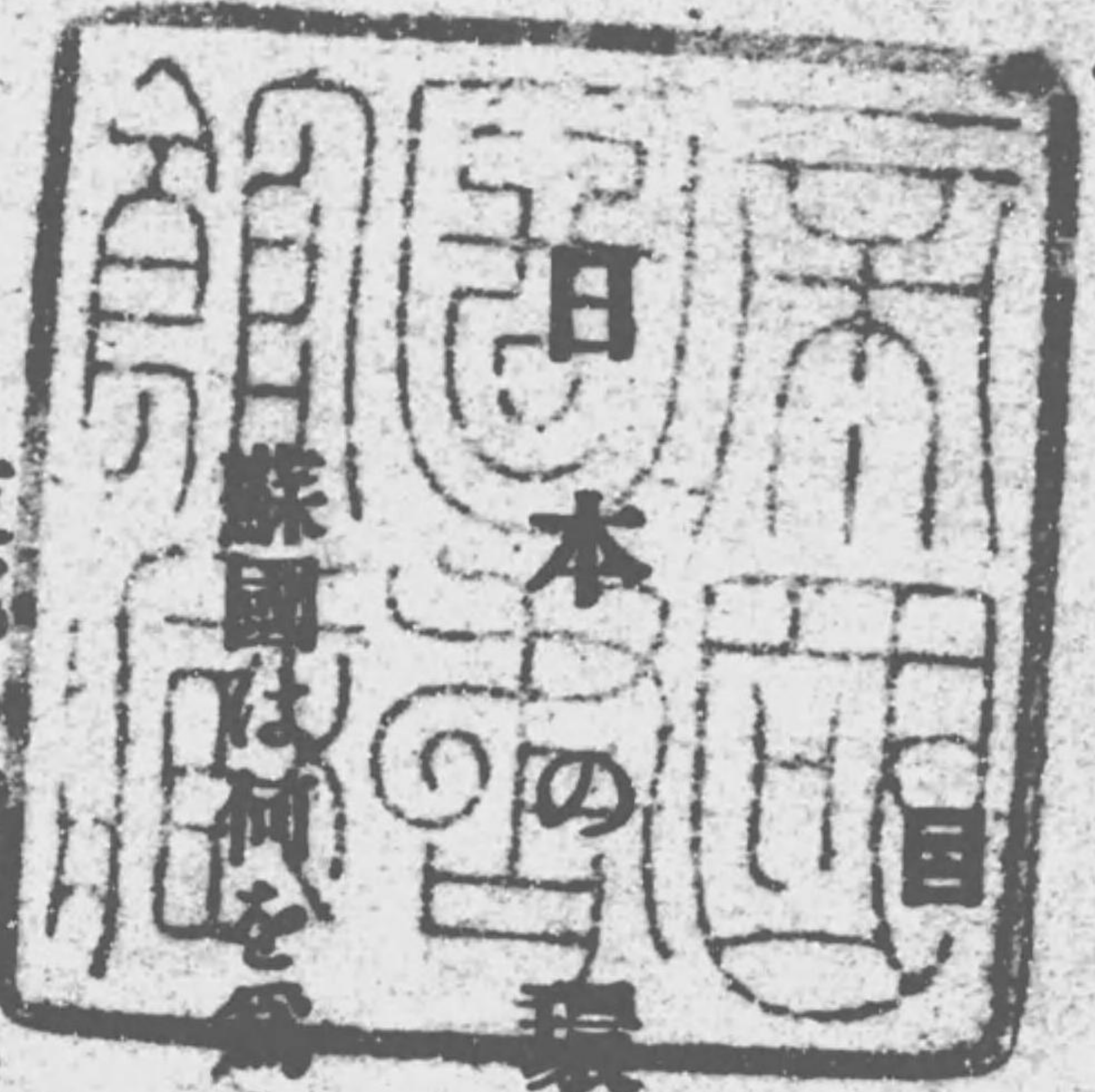
兵庫県国防協會播州国防研究会本部・編

兵庫県国防協會播州国防研究会本部

昭和11

ABJ

特 249
299



次 境

蘇國は何を爲しつゝあるか？

支那の態度はどうか？

英米兩國は何を望むか？



三

一九

日本の環境



現時の世界は、戦争の興奮に
驅り立てられて居るのが一般的趨勢であると云ふに憚らな
い。世界大戦の後、世界平和の
集團的保障を以て任じた國際聯盟は、獨逸の脱退、再軍備
宣言及びライオン運軍、便太利の
エチオピア攻略、獨逸協定の成立、マンチツヒ市の聯盟關
係棄絶宣言等の問題も亦、既に其の崩潰の危機に立ち、歐洲の政局は頓に緊張の度を加
へてゐる。此の趨勢は延て世界に影響すると共に、海軍軍備協定の破綻は自然各列強
とも自國國防強化の要を痛感するに至つた、而して此の軍備の充實は獨り歐洲のみでなく
亞米利加に於ても亞細亞に於ても亦同様である。かゝる世界的軍備擴張の、事態の推移は
戰爭勃發の危機が切迫しつゝあると推察するも無理でなく、又推察し得らるゝ充分な根據
がある。

此の根據は世界の情勢に通じ、國際關係の動きを正當に見究めなば、自ら明かである。吾等國民の總てが此等の情勢を誤りなく認識し、以て現時に處し始めて國家の發展進歩が期せらるゝ次第である。此の如き情勢の間に立つ我帝國現時の情勢果して如何か、見來る時内外の事態は寔に容易ならぬものあるを感ずる。

數年來帝國が不撓不屈の奮闘を續け、躍進日本の雄々しき姿を具現し、名實共に東洋唯一の安定勢力たるの地位を築き上げ、更に益々其の進展に邁往しつゝあるに對し、列國は之を嫉妬猜疑し、中には之を以て帝國が領土的野心あると爲し、或は平和の均衡を破るものとして中傷譏誣し、世界人心を惑亂せしめ、凡有外交的術策を弄し、帝國をして國際的孤立の立場に置かんとするのみか、東亞に於ける自己の既得權擁護と稱して自己勢力の強化充實に狂奔し、甚だしきは帝國を誣ひ之を奸餌とし反つて自ら利權の獲得を敢てし、或は又軍備擴張の口實として着々其の整備實現を進めて居ると云ふ有様である、此の重大なる四圍の情勢に對し、一面内を顧みるに我國民の全部がよく今日此の時局を正當に理解して居るとは遺憾ながら言ひ得ない、時に或は爲にせんとするもの、術策に乗せられ、或は

自由思想其他に觸され殊更に時局を歪曲し、徒らに一時の偷安を貪り、明日に備ふるの念なき徒輩がある。現下の情勢に對し常に正當なる理解を持ち、誤らざる認識の下に郷黨を誘掖正導し、一部たりともかゝる誤れる觀念を有つものを無からしめ、全國民舉げて時勢に對する認識を持ち、帝國の立場を明瞭に意識せしむるに努め、以て負託の重きに對へ奉るべく期せねばならぬ。

茲に於てか聊か現時情勢の概要を述べて參考の一端に供したいと思ふ。

日本を繞る情勢の推移を極めんが爲には、どうしても世界に於ける國際關係から觀察せねばならぬが、以下述ぶる所は主として直接我帝國に影響をもつ現下の情勢に止める。

△

借て列強の東洋に向つてする今日の政策は、言ふ迄もなく人種的差別に基く當然の政策であるとして二三世紀前より踏襲し來つた侵略政策に外ならないが、世界大戰の後を享け歐米各國が蒙つた打撃を恢復すべく其の經濟活動の爲に新たな市場を求むるに汲々とし、世界中唯一つ開放せられた市場である東洋、就中支那を目指して其の野望を充たさんとす

る彼等の底意と、世界赤化を企圖する蘇國の思想進出が東洋に指向せられて居る事とは見
逃す事の出来ぬ所である。此等の政策遂行の爲め彼等が最も障碍とする所は日本帝國の存
在である、殊に滿洲帝國の隆々たる發展と、日本の躍進的大陸政策の具現とは彼等にどつ
ては頗る心よからの所なるが故に、此の障碍排除に凡有努力、凡有術策が施されつゝあつ
て「打倒日本」の目標に向ひ日本抑壓に努めつゝあるのが現時の實情である。又一面世界
の情勢は今や大戦後に於ける聯盟外交より再び大戦前の合縱連衡に歸りつゝあるが如きは
東亞の情勢に影響する事をも亦考慮すべきである。
以上の觀點に立つて吾等の環境を眺むるに先づ

蘇國は何を爲しつゝあるか？

元々露國は其の地勢上、北は北氷洋に塞まれ、南は世界の屋根と稱せらるゝ山岳に遮ら
れ、政治的にも經濟的にも進出すべきは東と西の兩方面であり、嘗ては東に向つて進出せ
んとし、日露の戦を醸して其の意圖を挫折せられ、次で西進せんとして世界戦を惹起し、

再び敗退して其の企圖を遂するを得ず、ソヴェート聯邦となつてよりは西方進出は到底望
むべくもなく「我等の運命は東方に於て決す」との信條に基き、支那方面より東方に進出
せんとして企圖する世界赤化の鋭鋒を逞ふしたのである。然るに其の間、滿洲國の建設、
日本勢力の大陸進出の事實に直面した、乍併彼として國家發展の途を東方に求むるより他
に途なく、銳意之が實現に努力しつゝあつて、其の實現の前には敢て日本との一戦をも辭
せざるの決意あるものゝ如くにも見らるゝ。之が爲め國內に於ては、彼特獨の強壓的壓制
政治を斷行して國力の補強増進に努め外に對しては凡有外交術策を施して國際間の地位を
高めんとして居る事は周知の事實である。或は佛蘇相互援助條約を締結して對獨脅威を輕
減し、近くは又チエツクスロヴァキアと結んで獨塊協定に依る中歐勢力に對せんとするや
の情報もある。要するに蘇國は歐洲方面に於ける脅威を極力減じて、出來得る限りの力を
東に指向せんとしつゝある。

嘗て佛蘭西の外交評論家が、佛蘇相互援助協約に對し「……ソ聯政府は佛國政府の爲
めに獨逸と戦ふ事は大に疑問とする所で、ソ聯邦は現制度の維持及び亞細亞征服にのみ其

の巨大なる國軍を使用せんとする傾向を多分に有して居る……」と喝破して居る、又以て其の間の消息を物語るものとも言へよう。

そこで蘇國の支那邊境に對する侵略的態度又は滿蒙國境に於ける軍備行動等に就ては、茲に筆を新たにする迄もなく世間周知の所であるが、今日此等の態度行動が著しく日本に對し、挑戰的であり且つ侮蔑的である事は、顧る注意すべきである。彼等は「日本との衝突は目睫の間に在る、そして戦へば必ず勝つに決つて居る、ソ國が此の必勝を知りつゝも今日尙裝備の充實を圖つて居るのは唯に軍の損傷を少くせんが爲である」と迄豪語宣傳して居るのを見ても如何に我國を輕侮して居るかゞ窺ひ知らるゝ。此の如き意志の働きから、頻發する數多き滿蒙國境の不法事件の性質が從來の單なる越境から逐次戰闘的行爲を加ふるに至つたのみか、東西兩國境方面に於て統一的計畫に基くものゝあるが如きを見、外蒙古との相互援助條約を結んで外蒙の歸趨を明かにし、曩には支那共產軍山西進入に絡まる蘇聯の策動、乃至新疆の赤化等々、明かに滿洲國並に北支に對し直接大なる脅威を與へつつある。

彼が極東に於てかく積極的行動に出づる所以のものは、一に彼が自國國內情勢の回復と、國際關係の好轉と、加ふるに其の軍の整備が殆んど出来たからに外ならない。即ち其の國內情勢に於ては、未だ國民全般に亘つて生活の安定は得られず、又ソヴェート政治を謳歌せざる衆多の住民ありとは云へ、絶對的強制に依つて國民を指導統制し其の實績の見るべきものある一方、國際關係亦前述の如く、一切の行懸りを捨て假令主義主張を異にするとも國際間の和親を圖る爲には之を意とせずして背後の安全を保障しつゝある。之に反し我帝國は國際的に孤立の立場にあるのみか、四圍の敵視を受けつゝある今日の有様、之を日露戰當時兩國の環境と較べ考ふるに格段の相違である事は言ふ迄もない。

又その軍備に就て概観せんか、彼の五ヶ年計畫の結果築き上げたウラル・グズネツツの大工場地帯、アンガラ河畔、プレーヤ及びユムソモリス工業地帯等の完成は、戰爭資源若くは軍需補給の源を、近く極東に有つ事となり尙浦據に極東工廠を、ニコラスクに兵器製造所を、ハバロフスクに各種軍需品工場を、イルクーツクに自動車、飛行製製作場を建設する等、大に注目すべき所がある。

鐵道網も亦着々軍事的に整備せられつゝある。滿洲國の出現に依つて彼としては今や要なき北滿鐵道を賣却し、之に代ふるにバム線（タイシキート——バイカル湖——ゼーヤ川の上流を経て樺太對岸に至るもの）を敷設する事とし、現在に於ては已にバイカル湖附近四十杆の完成を見たど報せられ、又ウネート線の復線工事は哈府、チタ間を完成し、尙ほ哈府——コムソモリスタ線を昨年起工して新設バム線に連絡することとし、其の他極東全鐵道の修理を行ふバイカル湖東岸の鐵道工廠は目下建設中で、本年末遅くも來年初頭には竣工の豫定にありといふ。其の外西伯利亞鐵道復線改築に伴ひ、停車場の間隔を短くし以て運行力の増大を期した事等、極東に於ける鐵道網の日露戰當時とは到底同日の論ならざるを知る。

而して此處に配備するに二十四萬の兵力を以てし、浦邊、哈府、ブラゴエチエンスク及びメウリヤを中心とする四集團とし、トーチカ陣の線に依つて國境に配備して居る。此の兵力は言ふ迄もなく我國軍の平時全兵力二十三萬より更に大きく、而も彼はその背後に百六十萬といふ巨大な兵力を有つて居る、加ふるに戰車、飛行機各々八百を極東軍に有する

外、機械化部隊化學兵團等、立派な裝備を保持して居る。そして此の極東蘇軍は鋭意その強化擴大を續けつゝあるものである。最近傳ふる所に依れば、滿ソ國境地帯全線に亘り、赤衛軍當局に依つて國防飛行化學協會支部が開設され、化學戰に對する凡ゆる軍事智識を附近住民に注入すると共に、國境地帯駐屯軍の増加を企圖し、特別任務を有するグ・ベ・ウ部隊の増加をして居るといはれ、特に最近東部國境興凱湖地方を中心としての軍事工作の強化に著しいものがある等、其の行動は益々露骨の一路を辿つて居る次第である。

極東の陸に於ける蘇國の軍備が此の如き情勢に在る一方、海に於けると情勢を瞥見するに是亦吾人の大に注視すべきものがある。

近年海軍の復興に乗り出した蘇國は、極東方面に對してこゝろ三三年の間に數十隻の潜水艦其他をその水面に泛べ、尙續々増加を企圖して居る。本年初頭ソヴェート大會の席上、軍部當局は「陸軍及び空軍の擴張整備は既に略ぼ計畫通りに完成した、將來は主に海軍の建設に努力する考へである、今迄は潜水艦を主として小艦艇の建造をやつて來たが、今後は大型艦艇の建造をもなす方針である」と言明した事に想到し、ソ聯の海軍當局が嘗て「海

上機」といふ海軍信條を拒否し、小型艦艇に依る包圍作戰の主張を棄て、大艦巨砲主義を採ると共に、蘇國海軍の復興に邁進せんとする意氣込を知る。そして極東海面に於ても着着この言明を如實に實現し來り、現在では浦撻を中心に潜水艦四十五隻、特務艦十九隻、河用航空母艦二隻、驅潜艇九十隻以上、驅逐艦五隻、其他河用砲艦、碎水艦等合せて百八十六隻以上よりなる極東艦隊を有つに至つた。而して其の根據地及び沿岸防備の施設も、現在は浦撻を中心として着々進められつゝあるが、尙南樺太の對岸で近き將來陸上交通の要點即ちバイカル——アムール鐵道の終點たるベキソグエツカヤ灣及びカムチャツカのペトロパウロフスク灣等に必要なる軍備施設を爲さるゝに非ずやとも想像せらるゝのである。

此の如く日露戰役後全然其の影を極東海面より没して居つた露國海軍が、茲に再び出現して今日迄日本海が名實共に日本海として我が帝國の制海權内に在つたものを、今はそれをも許されない事となつた。尤も此の蘇國極東艦隊の出現に依つて帝國海軍の存在を脅すが如き事は現在の所毫もあり得ない所ではあるが、一朝有事の際、帝國本土と大陸との交通要衝である日本海方面に此の如く多數の新式潜水艦の出現は寔に輕視し得ない事實であ

る。三十餘年前日露戰爭當時、裝甲巡洋艦三、假裝巡洋艦二、水雷艦十七隻の露國浦撻艦隊の爲に我軍の受けた脅威は幾何であつたか、然るに今や彼は小なりと雖も百八十餘隻の艦艇を有ち、而も日滿空襲可能の飛行機約三千餘を有して居る事を忘れてはならぬ。

その外蘇國は航路の開拓に努力し、數年前から歐羅より北水洋を経て太平洋に出て浦撻に達する航路の開拓に努め、昭和七年夏已に其の可能なるに成功して以來、特別の役所を設けて毎年夏季多くの碎水船及び飛行機を以て之が開拓に従事しつゝあつて雖ては永久水に饋された北極の海も、普通の海と同様利用せらるゝに至らん、然る時はバルチック海と白海とを貫く運河(昭和八年竣工)を利用しレンングラードより浦撻迄、總て自國領海を経て航行し得る事となり、假令其の航行期間が一年の中夏丈けとしても、その以前遠く喜望峰を大廻りしたバルチック艦隊や乃至は地中海印度洋を經なければ東亞に來ることの出来なかつた事に想ひ較べて、極東海面の作戰上に尠からの關係ある事を見逃す事は出来ぬ。

極東水面に於けるかく新たなる情勢に就て尙一つ吾人の注意すべきは去る五月二十日以來の英蘇兩國海軍協定の會談である。本協定が傳ふる所に依れば「日本政府が新ロンドン

條約の條項を無視する場合には蘇聯政府は特に通報を要せず絶對秘密裡にいつでも建艦する事が出来る」との和協々定を見たと報せられて居る。之に依れば蘇聯政府は軍艦の機密を維持しつつ、極東水面上に日本海軍と拮抗し得る譯で、英國は日本の將來を警戒し、蘇聯政府の極東防備に関する特殊權を承認したともいふべく極めて重視すべき事柄である。

陸に海に如上の情勢を示す蘇聯邦は、空に於ても亦刮目すべき新情勢を示して居る。即ち其の航空路に於ては夙にモスクワ、浦塩間の幹線を開き、之に優秀なる大型飛行機を使い、又ハバロフスクよりニコライエフスクを經て北極太及びカムチャツカ方面に到るも及び此等の幹線に接續して重要地點を結ぶ數多の航空路を開き、又外蒙、新疆方面に對しても整備した航空網を張る等、極東航空路に關し特に力を注いで居る。そして其の飛行機は目下西伯利亞方面に約八百機を有し、而も多數の重爆機を備ふる所は大に注目すべき所である。其他外蒙古に於ては一隊五十機よりなる飛行隊二隊を有ち、その隊長は何れも蘇軍將校で、飛行士の九割も亦蘇國人である所を見て外蒙空軍は又蘇國空軍なりと見る事が出来よう。斯の如く月に日に整備擴大せられつつある蘇國の極東空軍の威力や實に目覺

ましいものがある。

述べ來つた所は極東に於ける蘇國現勢の極めて概要ではあるが、以て彼の抱懐し企圖する所が奈邊にあるかを判断し得らるゝと同時に吾等が之に備へ之に當るの途を講せねばならぬ事を痛切に感ずるものである。而して此等の情勢は時々刻々に變化しつつあつて、昨日の備へは今日既に其の要を爲さざるに至るが如き事もあらむ、情況の推移に深き關心を拂ふべきこと亦固よりである。

北方に於ける蘇聯の情勢此の如きの時、之と關聯的に最も重大な關係をもつ西の方

支那の態度は如何か？

依然として曖昧であり、謎のやうである。併し最近日本に對する態度が著しく惡化し、事態は刻一刻尖鋭化しつつある事柄は見逃すことの出来ぬ所である。

現時日支兩國の關係は極めて多岐多端、複雑錯綜で、一面親善を提唱するものあれば一面抗日を高唱するものがあり、凡有方面あらゆる部門に於て此の種の矛盾と撞着とが存在

して居る。此等表面的矛盾、撞着の裏面に支那國民の腦裡に脈々として流るゝ抗日氣勢の逐日眞剣味を帯びつゝある事は、支那の情勢を觀察する上に須臾も忘れてはならぬ所である。嘗て南京政府の役人や國民黨員等に依て抗日を指導せられた當時の學生運動、民衆運動等は、或る種の政治的策動か又は資金關係等、背後工作の筈に踊つた群集心理に過ぎなかつたが、年と共に殊に滿洲事變以後此の意識は支那の國民主義となり來り、今では此の抗日あるが故に支那民衆の精神的統一が出來つゝあるとも云ふべきで、此の抗日運動を基礎とする國民意識は今や南京政府の手に依つて如何ともなし能はざるべく、否寧ろ此の國民主義の上に立つて始めて其の政策を實行し得らるゝと見るべきである。

内に此の澎湃たる抗日意識に驅らるゝ民衆を持ち、外には以夷制夷、遠交近攻の策を弄しつゝある支那の態度こそ我帝國にとつて寸毫の油断をも許さぬ所であり、之が情勢の推移には細心の注意を要する次第である。

支那の現勢に於て最も著しい變化は蔣介石の手に依つて政治的統一完成に其の歩を進めた事である。今日迄中央政府に對し一敵國の觀を呈して居つた西南派が、陳濟棠の失脚に依つて先づ廣東が蔣の手に歸し、更に李宗仁、白崇禧の懐柔に成功して廣西をも亦其の掌中に收め得たと報せられる、かくて蔣介石は其の獨裁權力を兩廣の地に擴大し、多年の宿望であつた國內統一事業に急速なる一大進展を來たしたのである。

此の西南派の没落に依つて進められた國內統一の氣勢は、直ちに北支方面に向つて其の歩を進めるであらう事は疑ふ餘地なく、既に蔣は北支に對して其の工作を爲しつゝあるのである、が、そこには冀察、冀東の政權と、日本の特殊的關係とがある、従つて其の間如何なる事象を醸すに至らんか付り知るべくもない。傳ふる所に依れば、南京政權は北支に於て日支の經濟提携を策するのを主眼として居るとの事であるが、此の經濟提携の爲には先づ北支に於ける政治的安定の必要がある。然るに南京側が之に關しては何等の考慮を拂つて居らぬ所に大なる撞着があり、延てその統一工作の及ぶ所が單に經濟提携の挫折に止まらず、政治的に日支の間に危機を孕むの恐れが多分に存して居る。

加之、支那の統一そのものに就て今日の情勢は頗る日本にとつて不安な事態が醜護されて居る。元來支那の統一は東洋平和の上から我國として最も希望し來つた所ではあるが、

今日その統一事業の進展に伴つて支那の採りつゝある政策が、一も二もなく歐米依存で、日本と協調すると云ふよりは寧ろ抗爭的態度に出て居る所より、吾等は唯簡單に此の統一を歎び眺むる譯にはいかない。

國民政府と因縁淺からの蘇聯邦との關係は今更言ふ迄もなく、時に蒋介石の容共政策となつて共産軍の北支一帯の活躍ともなり、又或は蘇支密約を締結して日本に當らんとする等、自己勢力擴大の前には手段を選ばざるの愚を敢てし、近くは獨逸との密約、米國との借款成立等、その國際關係は經濟方面のみでなく、國防軍事の施設に迄歐米の力を借り、乃至は軍事協定に近き性質を有つ協約を結ぶといふが如き情勢は、日本として果して歐米するを得べき事であらうか。今日の此の情勢の進む所は、歐米の政治的又軍事的勢力が、統一に名を藉つて支那に入り込み、我國の今日迄の努力と希望は根底より蹂躪せられ、東亞の平和は茲に一大脅威を受ける事となる。吾人が今日支那の此の統一事業の成行きに細心の觀察を要すと述ぶる又故なきではない。

右の外吾人が誤りなき觀察を以て注視すべきは、支那内政上の情勢である。今日支那は滿洲事變以來、日本の公明なる態度を殊更に曲解し、滿洲及び北支に於ける行動、工作を目して直ちに侵略行爲と斷じ、更に進んで支那全領土の危險を叫びて之に抗せんとし、日本を假想敵國として軍事、經濟、政治の凡有部門に向つてその整備を進めて居るのである。

聞く、支那沿岸到る處日本に面した海岸に防禦工事を施し、黃河右岸には長距離に亘る半永久築城を、又南京より揚子江下流に至る要地に要塞を築き、而も夫等の總てが日本軍に向つて構築せられありと、此の事實は果して何を吾等に教ゆるか。又其の軍隊は改善進歩して昔日の觀なく、殊に蒋介石直屬の十五個師團の如きは近代の裝備を有し、機械化された武装を持ち、新鋭なる爆撃機、戦闘機を有する空軍は整備され素質又優良なりと云ふ。其他民間男女青年の軍事訓練を行ひ、蒋介石の新生活運動と關聯し、國民の非常時統制訓練に重點を置き、前述の如き國民の澎湃たる抗日意識と相俟つて實に侮るべからざるものがあると傳ふ。

之を要するに支那の現勢は、滿洲事變以來、其の國民は精神的に日本と交戦情態を繼續して居るものと見るべきが至當であらう。而して出來得れば武力を以てしても打倒日本の

實を擧げたいのが彼等の底意とも見る、然し彼は内に未だ其の力の足らざるを知つて臥薪嘗膽隱忍して居るの型で、若し今彼に力を貸すものありとせば、溺るゝもの業をも掴むの心理で、それが如何なる國であらうとも直ちに飛附いて助力を求めんとしつゝあるの現状である。

獨支の密約、米支の借款、且つは吾人の最も注意すべき蘇支密約等、實に此處に因する。唯今日彼が日本に對し、不即不離の曖昧なる態度を表面偽裝する所以は、世界各國が各々自國內の不安と國際難局に忙殺せられて居る間、何とかして時日を遷延し、世界政局の小廉を得るか若くは東亞への實力進出を爲し得る時を待つて、歐米依存就中蘇支提携の本舞臺に乗出す魂膽に外ならぬと判斷するは誤りか。嘗て日本を遼東から驅逐するに露國と結び、露國を滿洲より放逐するに日本の力を利用した彼である、今日彼が此の故智を再燃せんとするものと斷するに何の不思議があらうぞ。

此の意味に於て、如何に世界情勢の動きが吾等の環境に波及するかを悟る。

△

以上蘇支兩國の現勢を概観し來る時、東亞の事態が如何に重大なる時局を孕むかを知ると共に、此等情勢の推移に最大なる關心を拂ふ事が、現下に處する國民の一大責務なるを痛感する。

かゝる逼迫した東亞の情勢に處する吾等としては、更に東洋に關心を持つ列強、殊に英米兩國の態度に就て注視を怠つてはならぬ。果して然らば

英米兩國は何を望むか

世界列強の動きは太平洋に其の覇を争ひ、所謂太平洋時代とも稱せらるゝ今日である。而も太平洋そのものには因より相當の價值はあるも、其の最も大なるは支那に於ける勢力の確執、それが太平洋問題の主要なるものである、従つて東亞に最も利害關係があり、關心がある英米二國は虎視眈々その爪牙を磨きつゝあるのである。而して此等野望遂行の爲め最も障碍となるは日本帝國の嚴存であり、その發展である事は前既に述べた所である。茲に於てか彼等は日本勢力の抑壓、牽制に渾身の努力を惜まない、彼の海軍を縮會議に於

て飽く迄も帝國海軍をして彼等の劣勢下に置かんとした底意も、煎じ詰むれば之が目的達成の爲に外ならない。

米國は由來支那の文化的事業に力を注ぎ、米支の精神的融合と、自己の産業的特性と相俟つて地盤確定に努力すると共に、對支施設上國防的にも亦意を用ひ、中、南支に於ける航空權の獲得より、更に米大陸とマニラとの間に航空路を開拓し、本土と東亞との連絡を完成し、又近くは老大なる米支借款の成立に依つて、支那の經濟界乃至軍事的方面に飛躍せんとすと報じて居る。

かく支那に對する勢力の進展を企圖しつゝあるに伴ひ、之が政策遂行の背景として太平洋方面を對照とする軍備の充實に努め、壓倒的優勢の地位を贏ち得んとして居る。即ち昭和六年以後急速なる建艦を開始してより、其の大部は昭和十四年を以て竣工し、昭和十六年には航空母艦、甲、乙兩級巡洋艦、驅逐艦、潜水艦等合せて百五十三隻、四十二萬九百五十噸を整備完成するの豫定であり、又明年より主力艦の代換に着手し、其の第一着手の二隻は三萬五千噸級であり、尙補助艦船二十二萬噸の建造案等、其の勢力は、帝國が計畫せ

し第三次の擴充を實施せざる以上、昭和十四年前後に於て彼は我に比し絕對優勢の地位を確保する次第である。

乍併此の勢力比較に就ては、帝國が軍縮會議脱退後の今日、恰も無條約情態に在るを以て英米兩國が將來秘密裡に如何なる海軍力を保有するに至らんか、全く付り知るべくもない事を考慮せねばならぬ。

其の他米國は五ヶ年計畫を以て、艦載飛行機二千、局地防禦用戦闘機三千の整備を實施しつゝあり、又現存主力艦の大改装、海軍人員の増加を圖るの外、太平洋沿岸の防備、グワム島の防備を夫々強化し、大西洋艦隊を太平洋岸に集中する等、その何れもが太平洋方面の軍備を目指して充實しつゝあり、本年度の海軍豫算は約十八億圓、軍費總計約三十五億圓に上るのである。尙北はアラスカ、アリゾナを經てカムチャツカに、南はニュージーランド、滿洲方面に航空路を開拓しつゝある。布哇群島の眞珠軍港には五萬噸の大艦を扛上し得べき世界第一の大浮船渠を造り、又大艦修繕工場を造らんとしつゝあり、且つアラスカには飛行機一千臺に對する根據地を建設しつゝありと傳へられて居る。

英國は東洋に其の勢力を乗り出してより年久しく、西藏、青海を其の圏内に收め、長江流域に勢力を扶植した事實は言はずもがな、其の後世界情勢の流れに應じ、東亞の現勢に即して銳意其の施設を怠らず、殊に近時支那金融界の制覇を目指して彼のリースロス等の策動に依る幣制改革、並に鐵道を中心とする利權の擴張に汲々たるものがある。而して此等策動の當面の對抗者は勿論我が帝國であり、窮極する所、日本を支那の經濟界より驅逐せんとする真意あるに於て、我が朝野が擧げて彼の策動に對し充分なる監視を要するや論を俟たない。

英國の此の經濟進出も亦伴ふべき強力なる武力の背景に就て、逐日強化擴充を圖つて居る。外電傳ふる所に據れば、英國政府は今大約四億三千萬圓の國防追加豫算案を下院に提出したと報じて居る、然る時は曩に成立した海軍追加豫算約一億七千萬圓其他を加へ、本年度の國防費總豫算實に三十二億三千万圓の多きを示し、其の内海軍費は約十五億圓である。尙ほ明年度よりは主力艦其他多數艦船の建設をなすと聞く。此の擴張せらるゝ軍備は、歐洲現下の情勢に應じたるものは元よりではあらんも、又東亞に向つてする彼の積極的行

動の背景たらずと誰が保證し得るぞ。現に彼は香港の要塞を、補備改善し、新嘉坡に東洋艦隊全部を收容し得べき大軍港を設備し、之に嚴なる防備を施す外、一大航空根據地を設けつゝあり、又大巡洋艦以下十隻を東洋に増派するに見て、其の邊の消息を窺知し得らるるに非ずや。本年春チャール元海相は「新嘉坡軍港が防備的見地より計畫されあるは甚だ遺憾である、宜しく攻撃的前進根據地として建設すべきである」と當局に進言したといふ。東亞に於ける彼の攻撃目標果して何れの國か。想ふて此處に到らば吾等が環境如何に緊張そのものであるか敢て多言を要しない。

更に歐洲現下の情勢に眼を轉せば、伊エ紛争當時に於て英國は地中海上伊國の爲に苦杯を嘗めさせられ、たよる聯盟の影は薄らぎ、中、南歐情勢の悪化に伴ふて老大、英帝國の苦境又甚だしきものあるの秋、彼が極東に向ふ進展殊に支那への經濟制覇の確立を以て一方此の難局を切抜けんとする、又自然の道程ともいへよう。此の故にこそ彼として日本の存在と進展とが目の上の瘤なのである。

△

以上述べ来たつた所は現時に於ける環境の極めて重要である。

如上列強は何れも東洋に向つて自國勢力の伸張を圖り、之に必要な實力の整備擴充を期して居る。而して我帝國は恰も此の争鬪戦場の真只中に位し、北よりは蘇國、東よりは米國、南よりは英國、そして西には支那と、凡有勢力に依つて四方包圍せられつゝあるの現勢である。時局遂に重大、非常時局と云ふも中々愚かである。

乍併かゝる困難なる情勢は躍進途上に於ける當然の現象であり、此の困難障礙を打破してこそ、始めて我帝國の發展が期せらるゝのである、吾等は今日の此の非常時局に當つて益々洋々たる皇國の前途を想はねばならぬ。

終りに臨んで再言す。現時帝國の直面する此の重大時局を乗り切り、國家永遠の安泰を期せんが爲には、帝國の四圍に襲ひ来る列國の動靜に注意し、萬一此の國際關係の平衡を失するが如き事あらば、直ちに之に應じ得るの準備と覺悟とを養ひ、眞に舉國一致、官民一如の實を擧ぐる事が肝要である。

昭和十一年八月二十五日印刷
昭和十一年八月二十八日發行

【非賣品】

兵庫縣國防協會

發行所 播州國防研究會本部
(姫路縣隊區司令部内)
電話 大坂二六〇五

印刷所 姫路市久保町四九二ノ二

公明堂
電話二一六番

印刷所 姫路市久保町四九二ノ二
内海光次

P